

飯泉 仁*

Masashi HIZUMI*

Tuva or Bust! という本を読んで、大変面白かった。後で「ファインマンさんの最後の冒険」という書名で邦訳されていることを知った(岩波書店)。ファインマンが、いつも話し相手をつとめている若者(「ご冗談でしょうファインマン先生」などの編著者、ラルフ・レイトン)とともに、チューバと呼ばれる国へ行ってみようとして試みた行動記録である。チューバ国とは、ファインマンが、子供の頃、三角形やダイヤ形にらくだや遊牧民が描かれている切手で知った国である。シベリアとモンゴルの国境に位置し、早くからソ連邦に併合され、今やどうなっているかわからない国。そういう意味では、冷戦たけなわの当時、西側の人間にとっては、最も到達しがたい国であった。それだけの理由で、二人はその国へ是が非でも行ってみようと思いつく。まずその国のことを調べることから始めて、あらゆる手段を試みる。実に10年間にわたる努力の末、最終的な招へい状が届いたのは、ファインマンがガンとの戦いの末、ついに亡くなった直後のことだった。

ファインマンらしい知的好奇心に横溢したこの話し自体面白かったが、それを通して科学的探究のあり方を考えさせられた。感じたことを書いて参考に供したい。

まず第1に、このような荒唐無稽とも思える遊びの領域と、真摯な研究活動とに、共通するものがあり、学ぶべきことがあるのではないかという点だ。研究の世界では、人のやらないことをやってみようという挑戦が大事だ。それはどの分野であれ、深い学問的理解から出発するものの、アイデアの出し方は、以外に遊び心と通じるのではないか。いや、遊び心あってこそ、柔軟で多彩なアイデアがでるのではないか。どんなことでもいい、人と違うことをやろう。それによって、画一的でない、ユニークな存在になりたい。それがファインマンの根源的な欲求であり、創造性の起源だった。

第2点は粘り強く進めることである。目的に向かってとにかく粘る。あらゆる手段を尽くす。いろんなアプローチを並行して進める。直線的にだけではなく、回り道も辞さない。チューバ国に行くためにいろんな手だてを講じたことだけで、1冊の本になってしまうことから、ファインマンが単なる天才でなく、マニアックなほどの努力家だったことが分かる。

第3点は、その過程を楽しむことである。大きな目標に向かっての、一つ一つのステップ。それがうまく行ったり、行かなかったりする。その一つ一つの成否を楽しむのである。うまく行けば「やったぜ」と、小さな達成感を味わい、うまく行かなければ、相手の頑迷さをあざけりながら楽しむ。そうして最後に大きな達成感をものにする。

研究に志す若い人たちに、冒険心と、大きなロマンと、粘り強さと、仕事を楽しむ遊び心を期待したい。

* 日本原子力研究所 (〒100 東京都千代田区千代田 2-2-2)

* Japan Atomic Energy Research Institute, 2-2-2 Uchisaiwai-cho, Chiyoda-ku Tokyo 100